



万葉の秀歌

上

熟田津に船乗りせむと月待てば

潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

額田王

あしひきの山川の瀬の響るなへに

弓月が嶽に雲立ち渡る

柿本人麻呂の歌集

四季のうつろい、たぎるような相聞、身を裂く挽歌――。

万葉集』二十巻は、日本人のこころの底に生きつづける抒情の原点である。

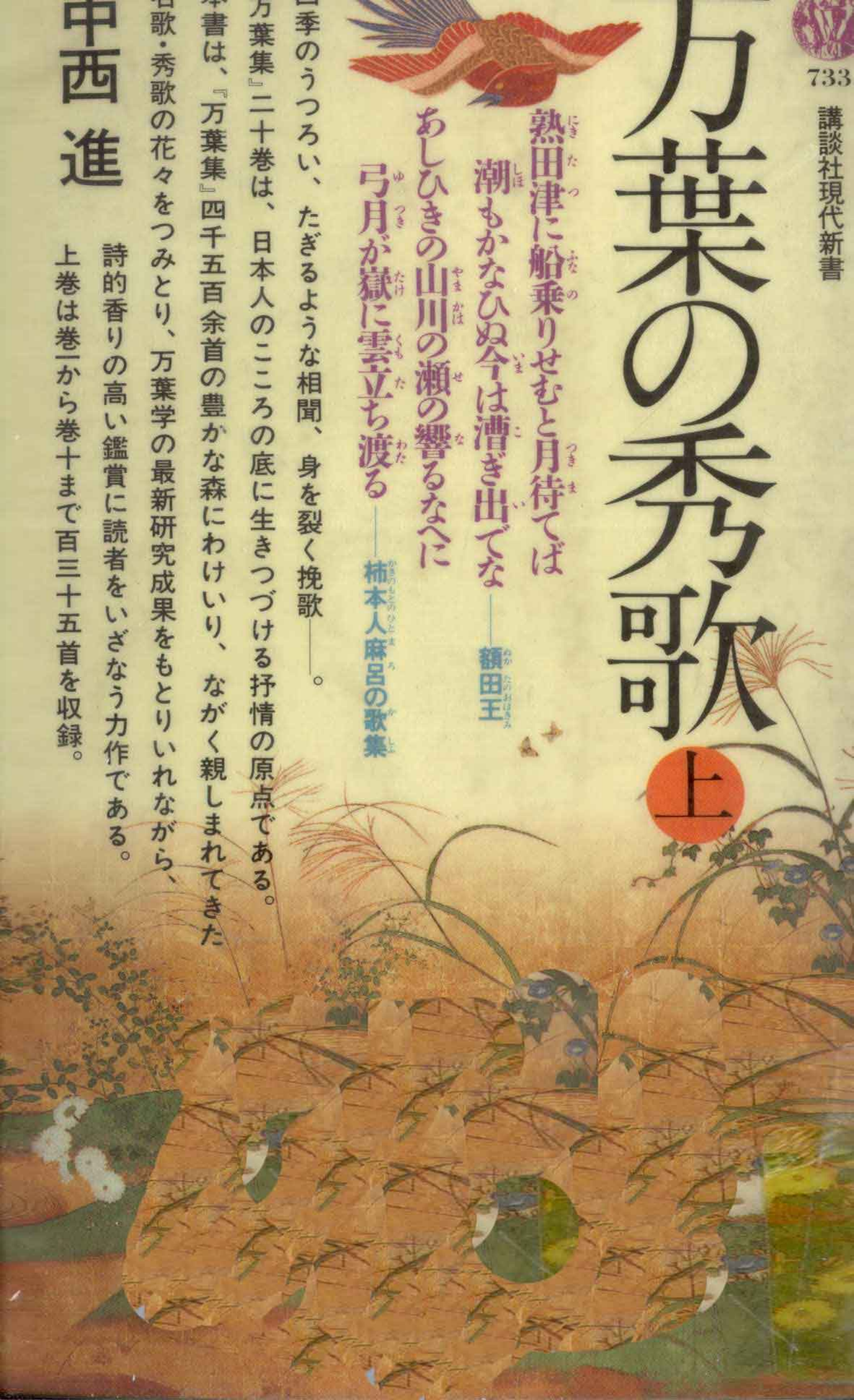
本書は、『万葉集』四千五百余首の豊かな森にわけいり、ながく親しまれてきた

古歌・秀歌の花々をつみとり、万葉学の最新研究成果をもとりにれながら、

詩的香りの高い鑑賞に読者をいざなう力作である。

中西進

上巻は巻一から巻十まで百三十五首を収録。



万葉の秀歌——①

昭和五九年五月二〇日第一刷発行

定価——五二〇円

著者——中西進

© Susumu Nakanishi 1984 Printed in Japan

発行者——加藤勝久 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二—三 郵便番号二二 電話〇三—九四—二二 振替東京八—三九三〇

装幀者——杉浦康平＋海保透

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

ISBN4-06-145733-0(0)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。(学1)

中西進



葉の秀歌
①

書談社現代新書

はじめに

いまでいえば高校一年生するときではなかったかと思う。私をはじめ『万葉集』に接したのは。国語の教科書に十首ほどが並んでいたのを覚えていたが、それがどの歌だったかはまったく忘れた。しかし鮮明に記憶に残っているのは高市黒人^{たけちのくろひと}や山部赤人^{やまべのあかひと}の名前が奇妙に思われたことだ。だから、歌を講じおわったあと、先生が「なにか質問はないか」といわれたとき、私は手をあげて、「黒人とか赤人とかという名前は、どんな意味ですか」と尋ねたほどであった。いまもなお私が尊敬しているF先生は、「さあ、それはわからん」とぶっきらぼうにいわれた。――多分、私がいま質問されても同じように答えるだろう。せいぜいいくつかの臆測を紹介するぐらいで。

もう一つ、同じころに級友がどこから聞いてきたか、しきりに赤人の歌を口にして、いいだろう、いいだろうといっていたことを思い出す。「わが背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れば」(四三六)である。もっとも彼はだれの歌とも万葉の歌ともいわずに、いいだろうと得意になっていたから、私が、これを赤人の歌だと知るまでには、いささか時間がか

かったが。

いま、こうした万葉の初まなびを思い起こしてみると、たいそう懐かしい。もう三十年以上も昔のことになった。しかし、そのころ感じた万葉の、なにやら神秘めいた魅力はいまだに忘れていない。何が神秘めいているのか、とにかく三十年経ったいまも、万葉はなぞに包まれていて、魅惑的である。

この魅力に惹かれて、いささかの鑑賞を試みたのがこの書物である。しかし、実はこの鑑賞のもとになっているものがある。東京のN区に万葉を読むグループがあって、そこで私は「万葉秀歌講座」というのを昭和四十八年から続けてきた。十年を越え百回を越えていまだに会は盛会だが、この会では、毎回講義録をつくってくれる。講義録は聞き上手のSさんが当日の話をもとに、すでにほかの書物に書いた私の意見をまじえながら、毎回見事なものに仕上げてくれた。その、厩^{ぼうだい}大な、百冊あまりの小冊子から歌を取捨し、加朱し、また新たに書きなおしてこの書物を脱稿した。

こうしたいきさつから、この書物は本文を私の『万葉集 全訳注原文付』（読談社文庫）によったことはもちろん、私のいままでの考えを集大成したような体裁にもなっている。とくに問題だったのは秀歌をとり上げる以上、従来言及した秀歌でも、重ねてとり上げることとしたことだった。その結果、当然既刊の拙著と重複する面が出てきたが、だからといって秀歌を落と

すべきではないと考えたので、読者の了解を乞うしだいである。

「初心忘るべからず」という。私はいまでもあの新まなびのころの素朴な疑問をもって万葉を
読んでいききたいと念願している。その念願を少しでもこの書物が反映していれば、望外の喜こ
びである。

中西進

*上巻目次

はじめに 2

卷一 10

- 籠もよ み籠持ち（雄略天皇） 12
大和には 群山あれど（舒明天皇） 14
やすみしし わご大君の 朝には（間人老） 16
たまきはる 宇智の大野に（同） 16
秋の野のみ草刈り 葺き（額田王） 18
熟田津に 船乗りせむと（同） 20
冬ごもり 春さり来れば（同） 22
あかねさす 紫野行き（同） 25
紫草のには へる妹を（天武天皇） 25
春過ぎて 夏来るらし（持統天皇） 26
やすみしし わご大君（柿本人麻呂） 28

阿騎の野に宿る旅人（柿本人麻呂） 28

ま草刈る 荒野にはあれど（同） 28

東の野に 炎の（同） 29

日並皇子の 命の（同） 29

采女の袖 吹きかへす（志貴皇子） 31

葦辺行く 鴨の羽がひに（同） 34

卷二 36

- 夕さらば 潮満ち来なむ（弓削皇子） 38
人はよし 思ひ止むとも（倭太后） 39
鯨魚取り 淡海の海を（同） 41
神山の山 辺真麻木綿（高市皇子） 43
磯の上に 生ふる馬酔木を（大来皇女） 45
朝日照る 島の御門に（草壁皇子の宮の舍人） 48
降る雪は あはにな降りそ（穗積皇子） 50
天飛ぶや 軽の路は（柿本人麻呂） 52
秋山の 黄葉を茂み（同） 53

黄葉の散りゆくなへに（柿本人麻呂） 53

秋山の したへる妹（同） 55

楽浪の志賀津の子らが（同） 56

天數ふ凡津の子が（同） 56

梓弓 手に取り持ちて（笠金村） 59

高円の野辺の秋萩（同） 59

三笠山野辺行く道は（同） 59

卷三 63

天離る夷の長道ゆ（柿本人麻呂） 65

やすみしし わご大王 高輝らす（同） 67

矢釣山木立も見えず（同） 67

淡海の海夕波千鳥（同） 69

旅にして物恋しきに（高市黒人） 71

天地の 分れし時ゆ（山部赤人） 73

田児の浦ゆうち出でて見れば（同） 73

三諸の 神名備山に（同） 76

明日香河川淀さらず（山部赤人） 76

駿なき物を思はずは（大伴旅人） 80

海若は 靈しきものか（若宮年魚麻呂の伝誦歌） 82

島伝ひ敏馬の崎を（同） 82

ももづたふ磐余の池に（大津皇子） 84

懸けまくも あやにかしこし（大伴家持） 87

わご王天知らさむと（同） 87

あしひきの山さへ光り（同） 87

卷四 91

君待つとわが恋ひをれば（額田王） 93

未通女等が袖布留山の（柿本人麻呂） 94

千鳥鳴く佐保の河瀬の（坂上郎女） 97

大和へに君が立つ日の（麻田陽春） 98

わが屋戸の夕影草の（笠女郎） 100

道にあひて咲まししからに（聖武天皇） 104

ひさかたの天の露霜（坂上郎女） 107

玉主に玉は授けて（坂上郎女） 107
恋ひ恋ひて逢へる時だに（同） 109
佐保渡り吾家の上に（安都年足） 112
み空行く月の光に（安都扉娘子） 114

卷五

119

世の中は空しきものと（大伴旅人） 121
妹が見し棟の花は（山上憶良） 123
大野山霧立ち渡る（同） 124
瓜食めば 子ども思ほゆ（同） 126
銀も金も玉も（同） 127
言問はぬ樹にはありとも（大伴旅人） 129
わが園に梅の花散る（同） 131
梅の花今盛りなり（田氏肥人） 133
風雜り 雨降る夜の（山上憶良） 135
世間を憂しとやさしと（同） 136
慰むる心はなしに（同） 141

世の人の 貴び願ふ（山上憶良） 143
稚ければ道行き知らじ（同） 144
布施置きてわれは乞ひ禱む（同） 144

卷六

148

泊瀬女の造る木綿花（笠金村） 150
やすみしし わご大君の 常宮と（山部赤人） 151
沖つ島荒磯の玉藻（同） 151
若の浦に潮満ち来れば（同） 151
やすみしし わご大君の 高知らず（同） 153
み吉野の象山の際の（同） 153
ぬばたまの夜の更けぬれば（同） 153
指進の栗栖の小野の（大伴旅人） 155
士やも空しくあるべき（山上憶良） 157
振仰けて若月見れば（大伴家持） 160
眉の如雲居に見ゆる（船王） 162
わが屋戸の梅咲きたりと（葛井広成伝誦の古歌） 164

立ちかはり古き都と（田辺福麻呂の歌集） 166

卷七 170

春日山おして照らせる（作者未詳） 172

あしひきの山川の瀬の（柿本人麻呂の歌集） 174

清き瀬に千鳥妻呼び（作者未詳） 175

ぬぼたまの黒髪山を（古集） 177

西の市にただ独り出でて（古歌集） 178

巻向の山辺とよみて（柿本人麻呂の歌集） 180

君がため手力疲れ（同） 182

青みづら依網の原に（同） 184

春日なる三笠の山に（同） 186

三國山木末に住まふ（作者未詳） 189

玉梓の妹は珠かも（同） 191

卷八 194

石ばしる垂水の上の（志貴皇子） 196

春の野にすみれ摘みにと（山部赤人） 197

蝦鳴く甘奈備川に（厚見王） 199

夏の野の繁みに咲ける（坂上郎女） 201

秋萩の散りのまがひに（湯原王） 203

夕月夜心もしのに（同） 205

秋づけば尾花が上に（日置長枝娘子） 207

大の浦のその長浜に（聖武天皇） 208

玉に貫き消たず賜らむ（湯原王） 210

沫雪のほどろほどろに（大伴旅人） 211

わが背子と二人見ませば（光明皇后） 214

ひさかたの月夜を清み（紀少鹿女郎） 216

卷九 218

白崎は幸く在り待て（作者未詳） 220

春の日の霞める時に（高橋虫麻呂の歌集） 221

常世辺に住むべきものを（同） 222

級照る片足羽川の（同） 226

大橋の頭に家あらば（同） 226

草枕旅の憂へを（同） 228

筑波嶺の裾廻の田井に（同） 229

後れ居てわれはや恋ひむ（阿倍大夫） 231

絶等寸の山の峯の上の（播磨娘子） 233

君なくはなぞ身装飭はむ（同） 235

秋萩を妻問ふ鹿こそ（遣唐使の親母） 237

旅人の宿りせむ野に（同） 237

玉津島磯の浦廻の（柿本人麻呂の歌集） 239

鶏が鳴く東の国に（高橋虫麻呂の歌集） 241

勝鹿の真間の井を見れば（同） 242

冬過ぎて春来るらし（作者未詳） 248

うちなびく春さり来らし（同） 250

風に散る花橘を（同） 252

天の川水陰草の（柿本人麻呂の歌集） 254

真葛原なびく秋風（作者未詳） 256

秋風に大和へ越ゆる（同） 258

白露を取らねば消ぬべし（同） 260

沫雪は千重に降り敷け（柿本人麻呂の歌集） 262

夢の如君を相見て（作者未詳） 264

卷十 245

子らが名に懸けの宜しき（柿本人麻呂の歌集） 247

●下巻は卷十一、卷二十を収録。

卷一

卷一は『万葉集』のなかでもっとも早く成立した、格調高く名歌揃いの巻である。天皇の御代を標記して、雑歌だけぞうかが年代順に配列されている。『万葉集』の始めにとる分類は、雑歌・相聞そうもん・挽歌ばんかで、相聞は贈答しあった歌、挽歌は死を悼いたむ歌であり、それ以外のいろいろの歌を雑歌とする。しかし雑歌といっても、「雑多」の意味ではない。実際には宮廷の儀式などで歌われた、なんらかの意味で公的な歌である。

『万葉集』は、まず最初に持統天皇時代じどうの柿かき本のもとのひとまろ人麻呂までの歌の集成があった。これを「原万葉」と呼ぶことができるが、それを中心として増補され、追補されたのが卷一および卷二である。

『万葉集』のもとのものは冊子でなく巻物であった。したがって、自由に切って継ぎ足すことも容易であっただろう。新しい和歌をあいだに挿入する増補も、全体のうし

ろに付け加える追補も、長皇子ながのみこと志貴皇子しきのみこ関係の歌を中心として行われたと私は考える。その時代は奈良朝の終わりが、光仁天皇こうにんのころである。光仁天皇は志貴皇子の子、時の政府の中心人物文室大市ふんやのおおちは、長皇子の子だったからだ。もちろんこれを実際に推進したのは大伴家持おおとものやかもちである。

卷一の歌数は長歌十五首、短歌六十七首の計八十二首だが、ほかに異伝の歌が八首ある。

一 籠^こもよ み籠^こ持ち 掘^{ふくし}串もよ み掘^{ふくし}串持ち この岳^{をか}に 菜摘^{なつ}ます児 家聞
かな 名告^のらさね そらみつ 大和^{やまと}の国は おしなべて われこそ居^をれ
しきなべて われこそ座^ませ われこそは 告^のらめ 家をも名をも

雄略天皇^{ゆうりやくてんわう}

最初に「泊瀬朝倉宮御宇天皇代」とある。五世紀、泊瀬に都した天皇は雄略天皇で、この天皇の恋の物語は『古事記』『日本書紀』に多い。『万葉集』には諸地域の歌があるが、泊瀬の歌がもっとも古く、『日本霊異記』も雄略から始められる。このことは、和歌・説話の時代が雄略天皇の時代から始まると考えられていたことを示している。そしてまた五世紀以後しばらくは大伴氏が過去の栄光に輝いた時代であった。それらのゆえに、この歌が巻頭におかれたと思われる。

「籠」はかご。「も」「よ」は詠嘆。「み籠」「み掘串」の「み」は美称である。「掘串」は菜を掘るへら。これらをくりかえすことによってことばに連続性をもたせ、かつリズムミカルに違うものへと転換させてゆく。こうして、作者が作詩の意識なしに見事に詩的表現をつかみとっていることに驚かされる。

もちろん、これは一人の作者によってつくられたものではない。「児」は女性をあらわす、

いとしさのこもることばで、「摘ます」も親愛の情をあらわす敬語。春先、もえ出た若菜をつむのは村をあげての楽しい野遊びの行事で、このとき女性集団に男性集団が歌いかけ、求婚するのがならわしであった。相手の持物をほめながら、男が女に近づいてゆくのである。次の「家聞かな 名告らさね」の「ね」は打消から願望になったことばで、家と名の二つをきいてゐる。家は家柄、名は呼び名である。その二つをきくことは、求婚を意味し、答えることは、応じることであった。

「そらみつ」は空に充滿している意で、「大和」の修飾辞であるが、ふつうは使わず、格式ばった全大和の偉容を意識したときにのみ使う。「おしなべて」は「強いて靡なびかせて」の意味で、権力誇示の台詞せりふであり、われこそ「座せ」、すなわち「いらっしゃる」というのも天皇の自称敬語である。

しかし「そらみつ」から「座せ」までは、その前後といかにも不調和で異質である。いまこの部分を伏せて、前後を読んでみると、まことにおおらかで、陽光輝く春の野づらに若菜つむ男女が興じあうさまが浮かんでくるではないか。

「われこそは 告らめ」の「告る」は、神かけた神聖なことばを口にするときの表現であり、いわゆる名のりである。この歌は本来民謡で、中心部に自由に即興的におのおのの名のりを詠みこんだものだったが、「雄略天皇恋物語」がつくられたときに、とりこまれた一首である。

もともとは、古代民衆が集団で享受した野外劇の台詞でもあったろうか。

『万葉集』は、巻一の一番から吾番くらいまでの歌がいちばん古く、とびとびに付加された歌をはさみこんで現形ができあがっているが、この歌は、八世紀になって、家持の手で巻頭におかれたものと思われる。

*

二
大和^{やまと}には 群山^{むらやま}あれど とりよろふ 天^{あま}の香具山^{かぐやま} 登り立ち 国見^{くにみ}をすれ
ば 国原^{くにはら}は 煙立^{けぶり}つ立つ 海原^{うなはら}は 鷗立^{かまめ}つ立つ うまし国そ 蜻蛉島^{あきづしま} 大
和の国は

舒明^{じよめいてんわう}天皇

これは国見^{くにみ}の儀礼歌である。国見というのは、春、山に登って国土をほめ、秋の収穫を予祝する行事で、この歌は、国見の歌としては、もっとも年代が新しく、これ以後、国見歌はなくなる。おそらく、この歌は、天皇の作という由緒をもつてのちのちまで伝承された讃歌だと思われる。

「大和には」から「国見をすれば」までが条件をあらわし、「国原は」以下に描写がある。この部分は、雄略天皇の「籠もよみ籠持ち……」の歌の中心部と同じく、国見の折々に従って、変えられるべきものであった。「うまし国^{すじん}そ」以下が結びとなる。

「香具山」は古来の聖山で、『日本書紀』崇神天皇十年の条の武埴安彦^{たけはにやすひこ}の話にあるように、その土をもつことが、大和の国の支配権を握ることになるとされるほどだった。そこから見る国原には「煙立つ立つ」という。この「立つ立つ」は万葉仮名では「立龍」と表記されており、「立ち立つ」と訓む説もある。しかし、「立ち立つ」では強調になってしまふ。そうではなく、「立つ立つ」というのはものごとのくりかえしをいう表現で、くりかえすことが、儀礼歌として必要であった。そのことにことばの祝福がこめられているのである。重ねて「海原は 鷗立つ立つ」とくりかえす。ここの「鷗」は、白鳥でなく、ゆり鷗だといわれている。

なお、「立龍」は次に、「立多都」と書かれており、三番の歌の「立たすらし」も「立須良思」「他田渚良之」と二様に書き、あるいは、ほかの歌で「敷布^{しくふ}」「伊与余麻須満須^{いよよますます}」などと書き替えられているのと同様、『万葉集』の書記者の趣味性によるものと考えられている。

大和には海はなく、低い香具山に登っても海は見えない。それで、この海は、かつて存した埴安池^{はにやすのいけ}だという考えもあるが、ここも前歌と同じく、修飾辞をもつ全大和の意識から歌われているので、まさに洋々たる海原を幻視している王者の歌である。